

平和を願う 戦争遺跡

人間魚雷「回天」

大神訓練基地

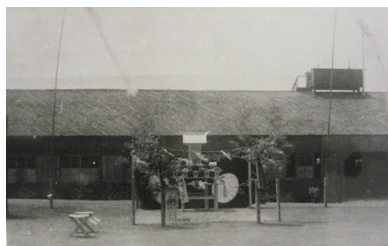
日本が窮地に立たされた太平洋戦争末期
世界に誇る魚雷技術を駆使し誕生した特攻兵器回天
国を想い 家族を想い 隊員たちは
回天作戦に命を賭けるべく厳しい訓練を重ねた

ひじまち
大分県日出町

平和への願い

回天神社のその後と大神回天会の歩み

厳しい訓練の日々を積み重ねてきた隊員たちは太平洋戦争終戦後、その任務を解かれ、それぞれの郷里へと帰路につきました。隊員の精神的支柱であった基地本部内の「回天神社」は、残務処理で残った隊員たちによって住吉神社境内に建てられたトタン葺の社殿に遷されまし



本部庁舎にあった神殿

た。住吉神社の末社として登記された「回天神社」は、大神突撃隊開隊日である4月25日を例祭の日と定め、以後、住吉神社宮司・氏子・総代によって手厚く祀られています。

「回天神社」の遷座は、終戦から解隊までの短く慌ただしい時期に、一部の隊上層部によって決められたことから、多くの隊員はこのことを知らない年月を経てこれを知った元隊員たちは、浄財を集めて昭和50年に社殿を改築（平成13年現在の場所に移転改築）し



例祭（毎年4月25日）

例大祭（3年に1度の4月25日）

かつて日本が国の存亡を賭け激しい戦火の中にあつた時代から半世紀以上の時が流れ、国民の多くは戦争を知りません。戦火を生き抜き、その過酷な日々を語り継いできた人々は、少なくなり、戦争が彼らにもたらした記憶の灯は、大地に深く刻まれた戦火の爪痕（つめあと）「戦争遺跡」へ受け継がれようとしています。

私たちの暮らしは、過去の戦争によって犠牲となった多くの人々の歴史の上に成り立っていることを、決して忘れてはなりません。再び戦争を繰り返すことのない、平和な

時代を築いていくためには、歴史を教訓にすることが大切です。歴史に戦争の真実を学ぶことは、平和な時代の構築、現に向けた大きな第一歩です。各地に残る戦争の記憶の灯を、現代に生きる私たちが絶や

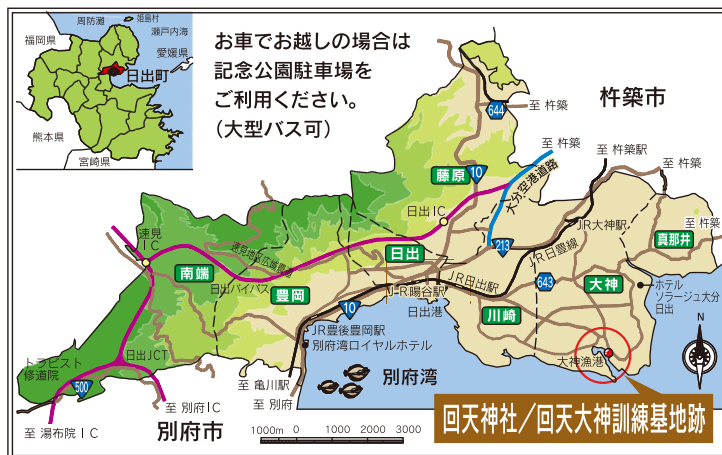


「回天」実物大模型（魚雷調整プール横）

【平和の実現に向けて】

- ① 生まれ育ったまち、住み慣れたまちに暮らす一人一人が、その地に刻まれた戦争の歴史を受け継ぐこと。
- ② 戦争の歴史とともに、戦争の犠牲となった人々、そして戦争を生き抜いてきた人々の思いや願いを受け継ぐこと。
- ③ 戦争はなぜ起き、繰り返されるのか、そして戦争は私たちに何をもたらすのか、その歴史と真実にしっかりと目を向けること。

回天神社／人間魚雷「回天」大神訓練基地跡案内図



お問い合わせ

日出町商工観光課 TEL0977-73-3158
日出町観光協会 TEL0977-72-4255
日出町観光情報公式サイト「ひじナビ」
<http://hijinavi.com/>

交通のご案内

■ 日出インターより車で 15分
■ JR 別府駅より車で 30分
■ JR 杵築駅より車で 20分
■ JR 日出駅より車で 10分
■ 大分空港より車で 30分

◎発行元／大分県日出町 ◎企画・編集／日出町観光協会
◎協力／大神回天会

平成30年(2018) 4月改訂

参考文献：人間魚雷回天特別攻撃隊 写真集(全国回天会編)
青春の賦(大神回天会)
おおいた戦争遺跡(大分県文化財保存協議会)
人間魚雷回天(発行 ザメディアジョン)

大神訓練基地

続いて、「大神海軍工廠」建設予定地の一部が回天特攻の基地として転用され、同年秋より、牧の内一帯を中心に基地建設が着手され、兵員や軍技術者



きびしい訓練をした搭乗員

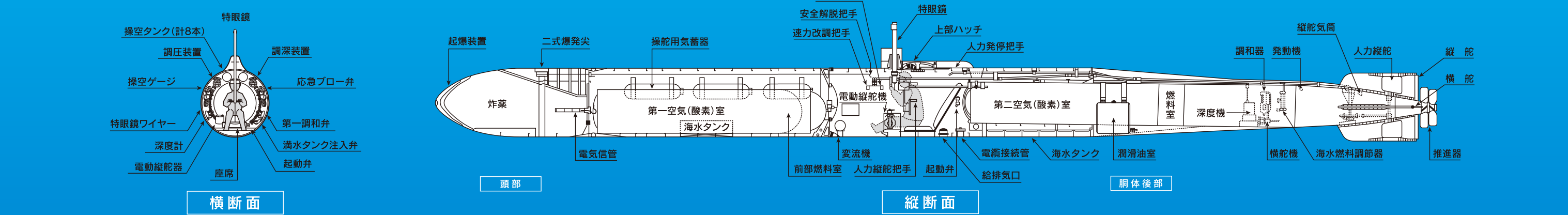
日、大神訓練基地から唯一の出撃があり、8名の隊員及び整備員が、回天8基とともに、第8特攻戦隊第21突撃隊として、愛媛県宿毛湾麦が浦へ向け

現在

牧の内、深江の港の周辺には、地下壕、魚雷調整プール、変電所、浄水場プール等の跡が残っています。

また、基地本部に祀られていた回天神社は、現在、住吉神社の境内本殿脇に移され、回天の模型と九三式魚雷機関が奉納されています。

回天一型改一のメカニズム



回天の性能	
■全	長：14.75m
■直	径： 1.00m
■全重量	：8,300kg
■速	力：30ノット(航続距離23km) 10ノット(航続距離78km)
■頭部炸薬	：1,550kg
■燃料	：酸素、白灯油
■搭乗員	：1名

1 船体構造

船体は頭部、胴体、九三式魚雷三型で構成。胴体前部には九三式魚雷の酸素気蓄器、燃料室、操舵用気蓄器、下部に海水タンクなどが装備されていた。胴体後部の前は操縦室で操縦席を中心に、電動縦舵機など様々な機器類が配備されていた。回天の安全潜航深度は80mで、搭載潜水艦の100mとすれがあったが、改良するには戦機に間に合わないため、そのまま作戦は進められた。

2 頭部

頭部には戦備する際に装着する実用頭部と、訓練用の駆水頭部の2種類があった。実用頭部には1,550kgの炸薬が充填され、如何なる艦船も撃沈できるといわれ、突入の際に搭乗員がスイッチを握り、命中時の衝撃により体が前方に傾くと自然にスイッチが入るようになっていた。駆水頭部は深度駆水室と応急駆水室からなり、海水を入れて訓練をしていた。

3 操縦

回天の操縦は基本的には自動操舵である。ジャイロコンパスを内蔵した電動縦舵機により制御され、搭乗員が設定すれば電動により所定針路に航行することができた。大神訓練基地に配備された回天(一型改一)は一型と異なり、潜水艦から搭乗するための下部ハッチがなく、陸上基地からの発進が想定されていた。外の観測や目標の把握には操縦席上部の特眼鏡を使っていた。

4 機関

推進機関は九三式魚雷三型を使用していた。この魚雷は純酸素と白灯油を燃料とし、燃烧室に噴射、点火し海水を霧状に噴射することにより高压高温蒸気を発生した。この蒸気に二気筒のピストンを作動させ、550馬力の出力が得られた。推進力となった蒸気は海中に排出され、その際に海水に溶け込んでしまい、気泡が発生しないため回天の航跡は敵より発見されにくかった。

5 訓練

大神訓練基地では別府湾で訓練が行われ、1回の訓練は1時間前後を要したといわれる。訓練には通常もう1人同乗させ、2人1組で猛訓練に励んだ。水雷学校では酸素魚雷の整備に1週間程度を要していたが、基地では2日に1回使用できるよう、夜を徹しての整備が行われた。訓練用の回天は16基程度あったといわれるが、1日の訓練では4～5基程度が使用された。

回天

歴史的背景と回天

昭和16年(1941)12月8日、日本海軍は米海軍太平洋艦隊の基地であるハワイ・オアフ島の真珠湾を攻撃し、太平洋戦争が始まりました。当初は攻勢に進んでいましたが、昭和17年(1942)6月、北太平洋ミッドウェイ沖の日本海軍連合艦隊の敗北を転機に、物量・質とも日本軍を圧倒する米軍の反抗が本格化し、日本本土が攻撃にさらされるようになりました。日本海軍が劣勢に立たされるなか、甲標的搭乗員の黒木博司大尉(当時は中尉)と仁科関夫中尉(当時は少尉)は、兵器庫に何百本と眠っていた九三式魚雷を改造して自らが操縦して体当たりする魚雷を提唱しました。「必死」を前提とする兵器は採用できないと一度は却下されましたが、二人の熱意により脱出装置のないまま、正式な兵器として採用され、黒木大尉の発案で「天を回らし戦局を逆転させる」という意味で「回天」と名づけられたのです。

回天の搭乗員

訓練基地として山口県中部瀬戸内海を囲むように大津島、光、平生、そして大神訓練基地が配置され、搭乗員が募集されました。ある航空隊での募集方法は、紙片が渡され、希望する者は◎、どちらでも良い者は○、その他については無印で、5分以内に提出せよ、というものでした。他人と相談することは禁じられ、大半の者が◎を書き、これに乗って祖国を救うしかない」と固く信じていたのです。

「回天」は伊号型潜水艦の甲板に出撃の際搭載され、潜水艦から離脱できなかったり、エンジントラブルなどよって出撃できず、無念の帰還をした者もいました。

回天の戦歴

昭和19年(1944)11月8日、大津島から菊水隊の回天搭乗員12名が3隻の潜水艦に各4基搭載してウルシー、パラオへと出撃し、給油艦「ミシシネウ」を撃沈しました。終戦まで28回にわたり出撃しましたが、詳しい戦果の確認はできませんでした。この回天作戦での戦没者は、104名とされ、その他に回天整備員、回天搭載潜水艦の乗組員など合計1073名にのぼりました。戦死した回天搭乗員の平均年齢は20.8歳であり、多くの若い命を失いました。

「回天」を提唱した黒木大尉(殉職後少佐)は訓練中に殉職しましたが、事故を起こした艇内で遺書としてその状況を後の訓練や実戦に生かすために対策などを冷静に分析し記録していました。また、もう一人の提唱者、仁科中尉(戦死後少佐)はウルシー環礁出撃で戦死しており、出撃前に日記に「黒木少佐ヲ偲ブ」という一節を残しています。特にこの二人は回天特攻の先頭に立ち、国土防衛を強く願う若者でした。

回天一型改一のメカニズム

大神訓練基地の全容



7 辻 (すべり)

回天格納壕、魚雷調整場より引かれた線路をトロッコが回天を載せて海岸線まで行き、傾斜を利用して海に浮かせるためのスロープ。現在は埋立地の中にある。

6 魚雷調整場

基地の中心部に位置し、最も大きい面積の施設。建物上屋は現存していないが、コンクリート製の基礎の一部と、擁壁の一部が残っている。

9 燃料格納壕

ねんりょうかくのうちうち。アルコール、重油、鉱油等の燃料が格納されていた壕。内部はし型になっていて、戦後しばらく燃料等が格納されていた。

8 各科倉庫壕

かくか。詳しい用途は分かっていない。非常時に使用する目的で造られたものと思われる。近くは震洋、飛行機運搬車格納庫、弾薬庫などがあった。

11 本部庁舎跡

ほんぶちやうしやあと。庁舎内の作戦室内に回天神社の神棚を祭る。現在ミカン畑となりその痕跡はみとめられない。北側グラウンドの隅で松尾少尉が自決したとされる。

10 士官浴場

しかんよくじやう。士官階級が使用していた浴場。建物の一部は個人住宅として使用されている。床下に浴槽の一部と屋根の垂木が残っている。

13 浄水場

じやうすいじやう。近くの池から水路を引き、3基のコンクリート製の槽により水を浄化し、高架タンクへ送っていた。基地の主要施設の一つであり、のどかな田園の中に現存している。

12 高架タンク所

こうかたんくじやう。広大な大神基地の施設に水を供給するため、高架台の上に木製の大きな桶を2つ設置していた。今は架台の基礎のみが残っている。

15 変電所

へんでんじやう。現存する壕のなかで屈指の規模であり、もっとも強固に造られているコンクリート製の壕。コの字型をしており、壁面に設備機器を設置したと思われる痕跡が認められる。

14 各科倉庫壕

かくか。迷路のように縦横に壕が掘り込まれている。その用途は、はっきりしていないが多目的に使用されており、非常時に基地が機能するよう造られたと思われる。

5 魚雷調整プール

ぎやうらいちやうせい。回天記念公園。コンクリート製のプール。調整場施設の一部にあり、回天を捲揚機にてこのプールに沈めて、水漏れなどを検査していた。現在プールの周辺は記念公園として整備され、回天実物大模型・駐車場・トイレなどが設置されている。また、公園内には平和を祈念する銅像が建っている。

3 回天格納壕

かいてんかくのうちうち。③の壕は回天1基が格納できる大きさである。④の壕の奥行きは約120mあり、終戦直前には、爆薬を搭載した戦備回天8基が格納されていた。この回天が愛媛県の表が浦へ出航した。

2 酸素圧縮ポンプ室

さんそあつしゆくほんぶしつ。回天に搭載する圧縮酸素を製造するポンプ等を設置していたとされている。内部にはコンクリートの構築物が残っている。

1 回天神社

かいてんじんじや。回天に關わって殉職した戦没者の霊、一〇七三柱を併せ祀っている。もともと本部庁舎内にあったが、戦後現在地に遷座した。御神器Ⅱ縦舵機、発停装置、燃焼器推進軸受

回天の部品3種類が御神器となっている